九重の高原から

さとばる時間

TAKE FREE

九重ふるさと自然学校
通信 Vol.47
2020. 秋号

九重のさとばる【里の草原】で育まれてきた自然や文化、そしてそこに流れるような
のんびりとした時の流れを感じてほしいという願いを込めて、「さとばる時間」と名付けました。

失われゆく日本の原風景

知っておきたい草原のハナシ

近年の日本で最も失われた景観は、「草原」と「湿原」だと言われています。
草原と聞くと、どのようなイメージを持ちますか。
阿蘇くじゅうの大草原には、異国情緒を感じる人も少なくないでしょう。

かつて草原は日本人にとって生活のために欠かせないものでした。
草原の草は、茅葺き屋根の材料や田畑の肥料、農耕に欠かせない牛馬の餌として、大切な資源でした。村や集落で管理され、守られてきたのです。
日本は森の国と呼ばれるように、国土の約7割を森が占めます。
その理由は温暖な気候と雨の多さ。木々が成長するにはこの上ない条件です。
自然の状態で草原が維持される場所は、高木が生えない森林限界に達する高山や海岸、湿地、川の氾濫原などに限られます。
そこで、人間が野焼きなどの「火入れ」や「草刈り(採草)」「放牧」を行うことで、本来ならば森林が広がる場所を草原として維持してきました。
時には草原を巡り、集落同士で争いが起こったとも聞きます。
草原は身近でありながら、極めて重要な存在だったのでしょう。

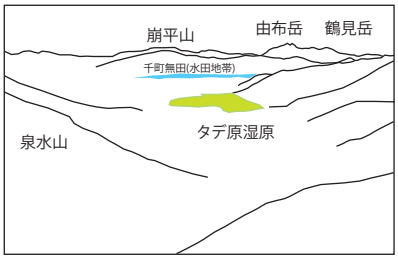
～中面に続く～

■PHOTO

『沓掛山(くつかけやま)展望台から眺める飯田高原』

左上は1960年代の様子。色が薄い場所が草原(原野)と思われます。50年後のいま、森がずいぶん広がりました。

(写真提供:九重星生ホテル)



一般財団法人
セブン-イレブン記念財団

九重ふるさと自然学校は、セブン‐イレブン記念財団が運営しています。

岐路に立たされる草原

1960年代に入ると、草原に転機が訪れます。日本人の暮らしが変わり始めたのです。
石油燃料の登場によって、農業の機械化が進み、集落からは農耕用の牛馬が減りました。また、肥料としては化学肥料が普及し、屋根の材料も茅から瓦に変わるなど、人々の暮らしに草原が必要とされる理由がなくなっていったのです。
一方、畜産業とのつながりで残されてきた草原もありましたが、それも飼料の輸入や牧草地への転換、高齢化による野焼きの停止などで、大きく縮小しました。明治・大正時代には、水田の面積(国土の9%)よりも広い草地(同11%)が広がっていましたが、現在では1%以下になり、日本から草原の風景が消えようとしています。

泉水山の麓では牛の放牧がおこなわれていた。現在は別荘地に変わっている

草原を守り、次世代に。なぜ、草原を守る必要があるのか

九重には「春は黒」という言葉があるように、野焼き文化が400年以上前から続いています。考古学では、日本では１万年前の縄文時代には野に火が入っていることが証明されています。しかし、縄文人が意図的に火をつけたのか、失火によるものかは定かでありません。
人による草原の維持が歴史上明らかなのは、古墳時代以降。この時期から牛馬の放牧が始まり、草原が管理されるようになりました。中世には軍用馬の供給のために「牧」が開かれ、火を使ってシカなどの獲物を追い出す「焼狩」も行われました。そして、人口が1000万人を超える江戸時代頃には、盛んに採草が行われ草原が維持されたのです。

古墳時代から数えると約1500年。この長い年月をかけ、人によって維持されてきた草原には独自の生態系が築かれ、現代も様々な恵みを私たちに与えています。このまま草原が消失してしまえば、その恩恵は失われます。
草原を再生することは簡単なことではありません。
50年以上前の暮らしに戻すことはできませんが、人と自然が共生することの意味をいま見つめ直すことが必要かもしれません。
草原の恵みを次世代にも。

草原のもつ価値

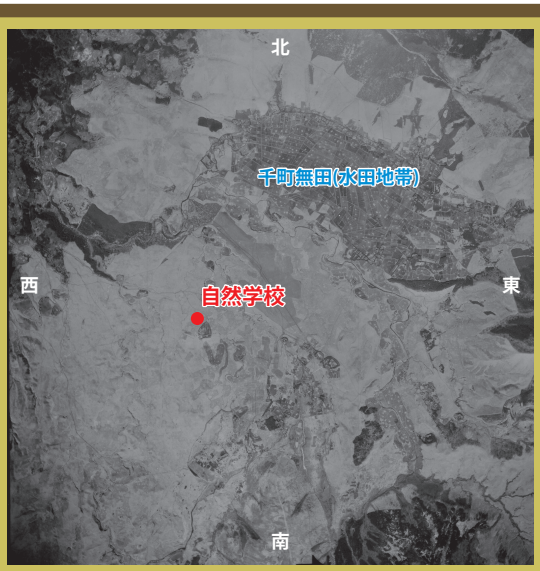
☆二酸化炭素の吸収・固定
⇒野焼きによる地球温暖化の防止

☆水源の涵養（かんよう）　⇒地中に水を蓄え、地表の土砂が流れ出るのを防ぐ

☆生物の多様性
⇒山菜や薬草の提供、生きものの宝庫
自然との親しみ・環境学習の場

☆伝統文化　⇒かしわ餅やちまきなどの食文化や野焼き

☆美しい風景　⇒心の安らぎ・癒し
観光・レジャーの楽しみ



タイムスリップ72years　航空写真で見るいまの自然学校周辺

表紙に続き、1948年3月30日に撮影された古い写真です。
この辺りは1889（明治22）年の字図の解析で原野、つまり草原が広がっていたとされます。草原に当たる薄色の箇所のなんと広いこと！
撮影時は3月末。例年なら野焼きの時期ですが黒くなっていません。
雪や雨に降られて延期になったのか、実施前のようです。
色が少し濃い箇所は、田んぼや畑で耕された土の色と思われます。
森や林は散見されるほど。自然学校からはくじゅう連山（写真では下方・南側）と果てしない草原の風景が、360度の大パノラマで見られたことでしょう。県道11号線（やまなみハイウェイ）は開通前で当然なく、事務所前のみいれが池も当時は田畑でした。

出典：国土地理院「地図・空中写真閲覧サービス」

草原にまつわる風習と生きもの

ススキと日本人

お月見

お月見は秋の澄んだ夜空にぽっかりと浮かぶ月を眺める年中行事です。一番有名なのは中秋の名月で、旧暦の8月15日（現在は9月中旬～10月上旬、2020年は10月1日）の月を指します。お月見はもともと中国の観月の風習が日本にもたらされ、秋の収穫に感謝し、豊作を祈願する行事になりました。

そのお月見に欠かせないのがススキとお団子です。ススキは垂れた稲穂に似ており、その代わりとして供えられますが、ススキそのものが神様の依代（よりしろ：神様が宿るもの）とも言われています。
月見団子は満月を表したもので、米粉で作る団子は稲作文化の象徴ですが、中秋の名月は別名「芋名月」、また旧暦9月13日（2020年は10月29日）は「豆名月」と呼ばれています。
それぞれ収穫期を迎える作物にちなんだ名前が付けられており、芋名月には蒸した芋を、豆名月にはゆでた枝豆などを供える風習があります。旧暦は月の満ち欠けを基準とする暦ですので、農業に月がいかに重要な存在であるかをうかがい知ることが出来ます。

子どものお楽しみ。あげたへさげたへ

お月見の夜は、子どもたちがお供えもののお下がりを頂くお楽しみが待っています。
今では少なくなりましたが、九重町では「あげたへ～（お月様にお供えしましたか）、さげたへ～（お供えものを下げましたか）」と声をかけながらご近所を回ります。元気な子どもの声が夜空に響き、ススキに宿った神様もにっこり微笑んでいるに違いありません。
日本の農耕文化に深く根差したお月見の風習。自然を慈しみ、自然に感謝する心をつなげていく大切な行事として残していきたいですね。

家主の「あげたへ～」の掛け声とともに、お供えものを探します。子どもはダッシュで散りぢりに！まるで宝探し

ススキを利用する生きもの

カヤネズミ

カヤネズミの「カヤ」とは細長い葉と茎を持つ草の呼び名で、ススキやチガヤ、スゲの仲間などを指します。これらは古くから屋根の材料や牛馬のエサなど、人の暮らしに役立ち、重宝されてきた植物です。そんな植物名がついたカヤネズミは、カヤとは切っても切れない関係であるとともに、里の人の暮らしのすぐそばにいる生きものです。

ススキなどの葉を細く裂き、それを編込むようにボール状の巣を作る。巣の中心部の巣材はススキの穂を使い、フワフワ柔らかくて暖かい。

日本最小。体重は500円玉ほど（約7g）。頭からお尻までの長さは5～8㎝、しっぽは体と同じぐらいの長さ（6～8㎝）

稲刈りの時に見つけた巣。稲の葉っぱを使って巣作りしていた

参加者募集

草原を守るボランティア活動

アナタの力を貸してください！

春の野焼きのための防火帯整備

11月21日(土)　10：00～15：30
場所：九重ふるさと自然学校

安全に野焼きを行うためには、防火帯づくりが必要です。
防火帯になる場所で刈った草を寄せていただく作業です。

野焼きボランティアも募集中。
（参加には講習会の受講が必要です。詳しくはお問合せください）

＊ご注意下さい＊ 積雪や路面凍結のため、九重にお越しの際はチェーンや冬用タイヤなどの装備が必要になる場合があります

秋冬の自然・里山体験プログラムのご案内

冬の九重バードウォッチング

11月28日(土) 9:30～12:00

九重町の清流沿いで冬鳥を訪ねます。セキレイ類などの川の鳥、ジョウビタキなどの里の鳥の両方を観察する、よくばりコースです。カワセミにも期待!

真冬のまったりバードウォッチング

2021年1月23日(土) 9:30～12:00

観察フィールドは飯田高原。田んぼや林、草原、人家などの様々な環境で、巧みに冬を乗り切る野鳥たちの様子に迫ります。

バードウォッチングデビューを応援♪
冬は木々の葉が落ちて、野鳥観察にオススメの季節。双眼鏡の使い方から野鳥探しのポイント・解説まで、スタッフがご案内します。双眼鏡の無料貸出もあり、初心者の方でも安心。

- ●料金　各回大人600円、子ども(小・中学生)400円
- ●対象　小学生以上
- ●定員　各回10名

自然で遊ぼう！おやとこ ～田んぼの巻～

しめ飾りとミニ門松づくり

12月12日（土）10:00～15:00

秋に収穫した稲わらで縄を綯（な）い、しめ飾りを作ります。竹で小さな門松にも挑戦。野外で採集するマツやナンテンの実などをふんだんに使って、良い年を迎える準備をしましょう。

- ●料金　大人1,100円、子ども(4歳以上)600円
- ●対象　幼児(4～6歳)、小学生とその保護者
- ●定員　20名

お申し込みは先着順です。
プログラムの詳細はホームページをご覧ください。
＊天候や社会情勢により開催中止や延期の場合があります。ご了承ください

土日・祝日限定開催 体験メニュー

所要時間約30分。予約不要、飛び込みで体験OK!

バードコールづくり 体験料500円

公園や森あるきのおともに♪野鳥の鳴き声を出せる道具

どんぐりクラフト 体験料300円

積む、くっつける、描く。自由な発想でゲージュツ家に!?

こどもクイズラリー 無料・参加賞付き

歩いて、探して、見つけよう!自然をまなぶ５つのクイズに挑戦

いきもの観察道具レンタルはじめました

手ぶらで気軽に！
生きもの採集＆観察

- ●虫とり網またはさかな網＋虫かごセット100円
- ●双眼鏡300円（ご利用時間：2時間）

※捕まえた生きものは、お持ち帰りいただけません。

ご来園のみなさまへ

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、ご協力お願いいたします。

①マスクの着用
（密でない野外活動時は外しても構いません）

②当日の検温と体調確認
発熱などの風邪症状があり、体調がすぐれないときは無理をせずご連絡ください。
（プログラムのキャンセル料は頂きません）

当校の自然体験フィールド「さとばる」園内3コースから散策できます。お気軽に♪

スタッフあとがき

今年、自然学校の草原ではオミナエシが咲き誇り、近年まれにみる美しさでした。これだけの開花には準備期間と理由があるはず。日常生活が激変した今年、来年へ向けて種が撒けたのか、オミナエシに問われているような気がします。（川野）

お問合せ **九重ふるさと自然学校**

（運営：一般財団法人セブン‐イレブン記念財団）

【開園時間】9:30～17:00　【定休日】火曜
※祝日・プログラム開催日は開園、翌日等に振替休業

〒879-4911 大分県玖珠郡九重町大字田野1726-408
TEL 0973-73-0001　FAX 0973-79-3434
kujyu-sizengakkou@7midori.org
ホームページ https://www.7midori.org/kokonoe　facebook でも情報発信中！

旬の自然のたよりは、ホームページ・フェイスブックで公開中!

★カーナビでの経路検索は「マップコード入力」が簡単！確実です。
MAPCODE 440 824 582*03 ←左の番号を入力してください。
＊「マップコード」および「MAPCODE」は(株)デンソーの登録商標です。

【編集・発行】九重ふるさと自然学校　「さとばる時間 2020. 秋号」（2020 年 10 月 21 日発行）ⓒセブン‐イレブン記念財団　001-2010-1800　S.K.P